

星をかぞえる夜

季節の過ぎゆく空には  
秋がいっぱい満ちています。

私はなんの心配もなく  
秋の糠星をすべて数えようとします。

胸の中に ひとつふたつ刻まれている星を  
いま すべて数えられないわけは  
まもなく朝がくるからだし、  
明日の夜が残っているからだし、  
まだ私の青春が終っていないからです。

星ひとつに 追憶と  
星ひとつに 愛と  
星ひとつに さびしさと  
星ひとつに 憧憬と  
星ひとつに 詩と  
星ひとつに オモニ、オモニ、

母さん、私は星ひとつに ゆかしい言葉のひとつずつをくちず  
さんでみます。小学校で机を同じくした子供たちの名と、佩、  
鏡、玉 このような異国の少女たちの名と、もう若い母となっ  
た女の子たちの名と、貧しい隣りの人たちの名と、鳩、小犬、  
兎、ラバ、ノロ鹿、「フランシス・ジャム」「ライナー。マリ  
ア・リルケ」このような詩人の名をくちずさんでみます。

これらはあまりにも遠くにいます。  
星がはるかに遠いように、

母さん、

そして あなたは遠く北間島におられます。

私はなんだかなつかしく  
このたくさんの星明りが降る丘の上に  
私の名を書ききざんで、  
土でおおってしまいました。

なるほど 夜を明かして鳴く虫は  
恥かしい名を悲しむからです。

しかし 冬が過ぎさり私の星にも春がくれば  
墓の上に青芝が息を吹きかえすように  
私の名が埋められた丘の上にも  
誇らしげに草がおいしげるでしょう。

(一九四一・一一・五)

### 별헤는 밤

季節이 지나가는 하늘에는  
가을로 가득 차 있습니다。

나는 아무 걱정도 없이  
가을 속의 별들을 다 헤일듯합니다。

pyə:l he:nün pam

kye:tʃəri tʃinaganün hanürenün  
kaülro kadük tʃa isümnida.

nanün a:mu kəktʃəŋdo ə:psi  
kaül so:ge pyə:lürül ta: he:iltutāmnida.

가슴 속에 하나 둘 새겨지는 별을

이제 다 못헤는 것은

쉬이 아침이 오는 까닭이오,

來日 밤이 남은 까닭이오,

아직 나의 靑春이 다하지 않은 까닭입니다.

별하나에 追憶과

별하나에 사랑과

별하나에 쓸쓸함과

별하나에 憧憬과

별하나에 詩와

별하나에 어머니, 어머니,

어머님, 나는 별하나에 아름다운 말 한마디씩 불러봅니다. 小學校 때 冊床을 같이 했던 아이들의 이름과, 佩鏡, 玉 이런 異國 少女들의 이름과, 벌써 애기 어머니 된 계집애들의 이름과, 가난한 이웃 사람들의 이름과, 비둘기, 강아지, 토끼, 노새, 노루, 「프랑시스·잠」 「라이넬·마리아·릴케」 이런 詩人의 이름을 불러봅니다.

kasüm so:ge hana tu:l sægyædzinün pyæ:rül  
idze ta: mo:te:nün gäsün  
swii atʃimi onün kadalgio,  
næil pami namün kadalgio,  
adzik nae t̃sɔŋt̃suni ta:hadzi anün kadalgimnida.

pyæ:lhanæ t̃ʃuækwæ  
pyæ:lhanæ saræŋgwa  
pyæ:lhanæ sül̃sül̃hamgwa  
pyæ:lhanæ to:ŋgyæŋgwa  
pyæ:lhanæ siwa  
pyæ:lhanæ æmæni, æmæni,

æmænim, nanün pyæ:lhanæ arümdaun ma:l hanmadisik pu:læbomni  
da. so:hakyo:tæ t̃ʃæksægül katihættün aidüre irümgwa, yæn,  
kyæ:ŋ, ok iræn i:guk so:nyædüre irümgwa, pælsæ ægi æmæni-  
tön kye:t̃sibædure irümgwa, kananhan iut sa:ramdüre irümgwa,  
pidulgi, kayadzi, t̃oki, nosæ, noru, 「puryænsisü·t̃jam」 「rai  
nel·maria·rilke」 iræn siine irümü l pu:læbomnida.

이네들은 너무나 멀리 있습니다.  
별이 아슬히 멀듯이,

어디면,

그리고 당산은 멀리 北間島에 계십니다.

나는 무엇인지 그리워  
이 많은 별빛이 나뉘어 언덕우에  
내 이름을 썩어 보고,  
혹으로 덮여 버렸읍니다.

따는 밤을 새워 우는 벼레는  
부끄러운 이름을 슬퍼하는 까닭입니다.

그러나 겨울이 지나고 나의 별에도 봄이 오면  
무덤우에 파란 잔디가 피어나듯이  
내 이름자 문헌 언덕우에도  
자랑처럼 풀이 무성할게이다.

一九四二・一一・五

inedürün namuna mə:lrı isümnida.  
pyə:ri asüli mə:ldüsi,

əmənim,  
kürigo taysinün mə:lrı puka:ndoe kye:simnida.

nanün müəsindzi küriwə  
i ma:nün pyə:lpit̄si narin əndəgue  
nə irümt̄sarül şə: pogo,  
hülgüro təpə bərişümnida.

tanün pamül səwə u:nün pərenün  
pükürəun irümül sülpəhanün kadalgimnida.

kürəna kyəuri t̄şinago nae pyə:redo pomi omyən  
mudəmue pə:ran t̄şandiga p̄ianadüsi  
nə irümt̄sa mut̄şin əndəguedo  
t̄şarənt̄şəram p̄uri mu:səyhalkeöda.

白い影

黄昏が濃くなる街角で  
おとろえた耳を静かにかたむけると  
夕闇の広がる足音、

足音を聴けるほど  
私は聡明であったのか。

いま 愚かにもすべてを悟ったあと  
永く心の奥底で  
苦しんだ多くの私を  
ひとつ、ふたつ故里へ送り返せば  
街角の暗がりの中へ  
音もなく消えさる白い影、

白い影たち  
恋々と愛した白い影たち、

私のすべてを送り返したあと

とりとめもなく露地裏をめぐる

黄昏のように染まる自室へ帰りついたら

信念の深いかたくなな羊のように

日没までぼんやりと草でもむしってしよう。

(一九四二・四・二四)

흰 그림자

黄昏이 질어지는 길모퉁에서

하로종일 시들은 귀를 가만히

땅검의 옮겨지는 발자취소리,

발자취소리를 들을수 있도록

나는 총명했든가요。

hin kŭrimdza

hwangho:ni tsiēdzinün kilmogūmesə  
harodzogil sidürün kwirul ka:mani kiurimyan  
tangame omgyēdzinün paltjatſwisori,  
paltjatſwisorivül türülsu ittorok  
nanün t̄sojmyəŋhættüngayo.

이제 어리석게도 모든 것을 깨달은 다음

오래 마음 깊은 속에

괴워하든 수많은 나를

하나, 들 제고장으로 돌려보내면

거리모퉁이 어둠속으로

소리없이 사라지는 흰 그림자,

흰 그림자들

연연히 사랑하든 흰 그림자들,

내 모든 것을 돌려보낸 뒤

허전히 뒷골목을 돌아

黃昏처럼 물드는 내방으로 돌아오면

信念이 깊은 으것한 羊처럼

하로종일 시름없이 풀포기나 뜯자.

△一九四二·四·一四

idze ʔrisəkedo mo:dün gəsül kʔedarün taüm  
oɾæ maüm kipün so:ge  
kōrowahadün su:ma:nün narül  
hana, tu:l tʃegodʒanjüro tolyəbonæmyən  
kərimotogi ədumso:güro  
soriə:psi saradzinün hin kürimdza.

hin kürimdžadül  
yə:nyəni saraghadün hin kürimdžadül,

næ mo:dün gəsül tolyəbonæxen twi:  
hədzə:ni twi:tko:lmogül to:ra  
hwayho:ntʃəɾəm muldünün nəbaŋjüro to:raomyən

si:nyəmi kipün üdzətan yəntʃəɾəm  
harodzogil sirümə:psi p̄ulpogina tütʃfa.



いとしい追憶

春がきた朝、ソウルのある小さな停車場で  
希望と愛のように汽車を待ち、

私はプラットホームにつらい影をふりはらって、  
タバコに火をつけた。

私の影はタバコの煙の影を吐きだし  
鳩の一群が恥かしげもなく  
翼の中を つぎ、つぎ、日光にさらし、飛んだ。

汽車は誰からの新しい便りもなく  
私を遠くに運んでくれ、

春はすべて去り——東京郊外のある静かな  
下宿部屋で、古い街に残った私を 希望と  
愛のようになつかしむ。

きょうも汽車は何度も無意味に通らずぎ、

きょうも私は誰を待ち 停車場に近い丘で

さまよふのだらう。

——ああ 若さよ 永くそこに残ってくれ。

(一九四二・五・一三)

사랑스런 追憶

봄이 오든 아침, 서울 어느 쪼그만 停車場에서  
希望과 사랑처럼 汽車를 기다려, 小ちなげな汽車에서

나는 플랫폼에 간소한 그림자를 털어트리고,  
담배를 피웠다。

saraysürən t̄suək

pomi odün at̄jim, s̄ul ənü t̄soküman t̄səngədzayesa  
hima:ngwa sarajt̄səram kitsarül kidarya,

nanün p̄lraet̄pome kansinan kürimdzarül t̄ərat̄ürigo,  
ta:mbærül piwatta.

내 그림자는 담배연기 그림자를 날리고  
비둘기 한떼가 부끄러울 것도 없이  
나래속을 속, 속, 햇빛에 비취, 날었다.

汽車는 아무 새로운 소식도 없이  
나를 멀리 실어다 주어,

봄은 다 가고 — 東京郊外 어느 조용한  
下宿房에서, 옛거리에 남은 나를 희망과  
사랑처럼 그리워한다.

오늘도 汽車는 몇번이나 無意味하게 지나가고,

오늘도 나는 누구를 기다려 停車場 가차운 언덕에서  
서성거릴게다.

— 아아 젊음은 오래 거기 남아 있거라.

一九四三·五·二三

næ Kürimdzanün ta:mbæyangi kürimdzarül nalrigo  
pidulgi hantega puküräul gatto æ:psi  
naræso:gül so:k, so:k, hætpitje pitjwa naratta.

Kitjanün a:mu særoun sosikto æ:psi  
narül mæ:lri siræda tjwa,

po:mün ta: kago — tonggyængkyö ænü tfoyo:ŋhan  
ha:sukpaŋesæ, yetkærie namün narül hi:ma:ŋgwa  
saræŋtjæram kü:ri wæhanda.

onüldo kitjanün myætþænina mu:i:mihage tjinagago,

onüldo nanün nugurül kidarya tjangædzan katjaun ændgesæ  
sæŋgærilkeda.

— a a tjo:lmümün oræ kagi nama itkæra.

## 流れる街

おぼろに霧が流れている。街が流れてゆく。あの電車、自動車、すべての車輪はどこへ流れてゆくのか？ 碇泊するどの港もなく、あわれなたくさんの人々を載せて、霧の中に沈んだ街は、

街角の赤いポストに手を置きたたずめば すべてのものが流れる中にぼうっと光る街路灯、消えないのはなんの象徴なのか？ 愛する友 朴よ！ そして金よ！ 君たちはいまどこにいるのか？ 果しなく霧が流れるのに、

「新しい日の朝 われわれはもう一度親しく握手をしよう」と書いて ポストの中へ投げいれて、もし夜を明かして待つなら 金のバッジに金ボタン やたらに付けて巨人のようにキラキラと現われる配達夫、朝とともに楽しい来臨、

この夜を とめどなく霧が流れている。

흐르는 거리

으스스히 안개가 흐른다. 거리가 흘러간다. 저 電車、自動車、모든 바퀴가 어디로 흘러워 가는 것일까? 定泊 할 아무 港口도 없이, 가련한 많은 사람들을 실고서, 안개속에 잠긴 거리는,

거리 모퉁이 붉은 포스트상자를 붙잡고 섰을라면 모든 것이 흐르는 속에 어렴풋이 빛나는 街路燈, 꺼지지 않는 것은 무슨 象徴일까? 사랑하는 동무 차이여! 그리고 金이여! 차네들은 지금 어디 있는가? 끝없이 안개가 흐르는데,

「새로운날 아침 우리 다시 情답게 손목을 잡아 보세」  
몇字 적어 포스트 속에 떨어트리고, 밤을 새워 기다리면 金徽章에 金단추를 빼었고 巨人처럼 찬란히 나타나 配達夫, 아침과 함께 즐거운 來臨,

이 밤을 하염없이 안개가 흐른다.

一九四二·五·二二

hürünün kəri

üsürəmi a:ngæga hüründa. kəriga hülraganda. tʃə tʃə:ntʃa, tʃa-  
do:ŋtʃa, mo:dün pakwiga ədiro hülriwə ganün gəsilkə? tʃənbak-  
hal a:mu ha:ŋgudo ə:psi, ka:ryənan ma:nün sa:ramdürül silgosa,  
a:ngæso:ge tʃəngin kərinün,

kəri mo:toŋi pulgün posütüsəngdzarül puttʃapko səsürəmyən mo:dün-  
gəsi hürünün so:ge əryəmpu:si pinnanün kərodün, kə:dzi dzi an-  
nün gəsün musün səngdʒinilkə? sarəŋhanün toymu pagiyə! kü-  
rigo kimiya! tʃənedürün tʃigüm ədi innunga? kü:psə:psi  
a:ngæga hürününde,

「sərounnal atʃim uri tasi tʃəngdapke sonmogül tʃəbə bəse」  
myətʃa tʃəgə posütü so:ge tərətürigo, pamül səwə kidari-  
myən kühwidzəne kündantʃurül piatko kə:intʃərm tʃa:nrani natana-  
nün pə:daibu, atʃingwa hamke tʃülgsən nərim,

ipamül hayəmə:psi a:ngæga hüründa.

たやすく書けた詩

窓のそとに夜の雨がささやき  
六畳部屋は他人の国、

詩人とは悲しい天命だと知りながらも  
一行 詩を書いてみようか、

汗の匂いと愛の匂いとがほんのり含まれた  
送ってくださいだった学費封筒をうけとり

大学ノートを脇にはさみ  
年おいた教授の講義を聴きにゆく。

考えてみれば 幼いときの友達を  
ひとり、ふたり、すべてなくしてしまい

私はなにを望み  
私はただ、ひとり沈んでいるのか？

人生は生きづらいのに  
詩がこれほどたやすく書けるのは  
恥かしいことだ。

六畳部屋は他人<sup>ひと</sup>の国  
窓のそとに夜の雨がささやくのに、

灯火を明るくして暗がりですこし追いやり、  
時代のように来る朝を待つ最後の私、

私は私に小さな手をさしだし  
涙と慰めでにぎる最初の握手。

(一九四二・六・三)

쉽게 씌어진 시

窓밖에 밤비가 속살거리  
六疊房은 남의 나라,

詩人이란 슬픈 天命인줄 알면서도  
한줄 詩를 적어 볼가,

맘내와 사랑내 포근히 품긴

보내주신 學 封套를 받아

大學 노트를 끼고

높은 教授의 講義 들으러 간다.

생각해 보면 어릴때 동무들  
하나, 둘, 죄다 잃어 버리고

swi:pke siädzin si

tʃanpake pampiga soksalgarya  
yuktʃabanün name nara,

siiniran sülpün tʃanmyə:ɣindzul a:lmɯənsədo  
handzul sirül tʃəgə bolka,

tamnæwa saraynæ pögü:ni pumgin  
ponædzusin hak poŋtʃurül pada

tæ:hak no-ürül kigo  
nülgün kyo:sue ka:ɣi türüryə ganda.

sængakæ bomyən ərintæ toy murül  
hana, tu:l, tʃö:da ira bərigo



나는 무얼 바라  
나는 다만, 홀로 沈澱하는 것일까?

人生은 살기 어렵다는데

詩가 이렇게 쉽게 씌어지는 것은  
부끄러운 일이다.

六疊房은 남의 나라

窓밖에 밤비가 속살거리는데,

등불을 밝혀 어둠을 조금 내몰고,

時代처럼 올 아침을 기다리는 最後의 나,

나는 나에게 적은 손을 내밀어

눈물과 慰安으로 잠는 最初의 握手。

△一九四二·六·三三

nanün muəl para  
nanün ta:man, holro t̃ʃi:mdʒənhənün ɡəsilk̃a?

insəŋün sa:lgi əryəptanünde  
siɡa ir̃ək̃e swi:pke siədʒinün ɡəsün  
pukürəun i:r̃ida.

yukt̃ʃəpəŋün mame nara  
t̃ʃəŋpake pampiga soksalɡərinünde,

tü:ŋburül pak̃ya ədumül t̃ʃo:ɡom næ:mo:lgo  
sidəet̃ʃərəm ol at̃ʃimül kidarinün t̃ʃo:hue na,

nanün naege t̃ʃo:ɡün sonül næ:mi:r̃ə  
nunmulɡwa wianüro t̃ʃəmnün t̃ʃo:t̃ʃoe aksu.

春

春が血管の中へ小川のように流れ  
ちろ、ちろ、小川に近い丘に  
レンギョウ、ツツジ、黄色い白菜の花

三冬を堪えてきた私は  
草のように息を吹きかえしている。

たのしい雲雀よ  
どの畑からも楽しそうに飛びあがれ。

青い空は  
ゆらゆらと高いのだが……

봄이 血管속에 시내처럼 흘러  
들, 돌, 시내 가차운 언덕에  
개나리, 진달래, 노오란 배추꽃

三多을 참어온 나는  
폴포기처럼 피어난다.

즐거운 중달새야

어느 이랑에서 즐거웁게  
솟쳐라.

푸르른 하늘은

아른아른 높기도 한데.....

pom

pomi hyalgwanso:ge si:nætsæram hülra  
to:l to:l, si:næ katʃaun ændæge  
kænarī, tʃindalræ, no:ran pæ:tʃukot

samdonjül tʃa:mæon nanün  
p̄ulp̄ogitʃæram p̄iananda.

tʃülgæun tʃondalsæ:ya  
ænü iranəsə tʃülgæupke sottʃyæra.

p̄urürün hanürün  
arünarün nopkido hande.....

尹東柱 年譜

- 一八八六年 曾祖父・尹在玉、咸北 鍾城から北間島 紫洞へ移住。
- 一九〇〇年 祖父・夏鉉、明東村へ移住。
- 一九一〇年 祖父、キリスト教入教。

日朝関係史

一九一〇・八 「韓国併合条約」公布。

一九一九・三 三・一 独立運動。

一九二三・九 関東大震災、朝鮮人虐殺事件。

一九三一・九 「満州」事変おこる。

一九三三・八 大学および専門学校に配属将校配置。

一九三七・三 総督府、日本語使用強化の通達を各道に出す。

一九三八・四 学校教育から朝鮮語教育排除。

一九三九・二 総督府「創氏改名」に関する制令公布。

- 一九一七年 二月三日、北間島 明東村で、父・尹永錫、母・金龍の長男として出生。幼名、海煥。
- 一九二三年 二月、妹。惠媛、出生。
- 一九二七年 二月、次弟。一柱、出生。
- 一九三一年 明東小学校卒業。大拉子で中国人官立学校修学。
- 一九三二年 龍井恩真中学校入学。一家、明東から龍井へ移住。
- 一九三三年 三弟・光柱、出生。
- 一九三五年 春、平壤 崇実中学校に転入学。
- 一九三六年 崇実学校が神社参拜問題で官に接收され、龍井に戻り、光明中学校に転入学。
- 一九三八年 春、光明中学校卒業。従兄弟・宋夢奎とともに延禧専門学校・文科に入学。
- 一九三九年 散文「月を射る」を朝鮮日報。学生欄に発表。童謡「山びこ」を朝鮮日報社発行の「少年」誌に発表。

一九四一年 一二月、延専・文科卒業。自選詩集「空と風と星と詩」を出刊しようとしたが、思いをはたせず。

一九四二年 東京立教大学・英文科に入学。夏期休暇で故郷・龍井に最後の帰郷。

秋、京都同志社大学・英文科に編入学。

一九四三年 七月、帰郷の途につく直前、思想犯として日本警察に被検。

(京都大学に在学中の従兄弟・宋夢奎も同時に被検)

一九四四年 六月、二年の刑の言渡しを受け、九州福岡刑務所に収監される。(宋夢奎もまた、二年六ヶ月の刑で同刑務所に収監)

一九四五年 二月一六日、同刑務所にて別世。

同 三月初、故郷・龍井・東山に埋葬。

同 三月一〇日、従兄弟・宋夢奎、獄死。

一九四六年 秋、遺作「たやすく書けた詩」が京郷新聞に発表される。

一九四七年 二月一六日、ソウル「フラワー茶房」にて追悼会挙行。

一九四八年 一月、遺稿三〇篇を集め、詩集「空と風と星と詩」を正音社から出刊。

一九五五年 二月、逝去一〇周年記念として全遺稿を集め、再び「空と風と星と詩」の題で詩集を出刊。

一九四一・三 思想犯予備拘束令公布。

同・二二 太平洋戦争はじまる。

一九四三・二 カイロ宣言で朝鮮の解放独立を決議。

一九四四 詩人・李陞史、北京

一九四五・八・一五 拷問により獄死。

民族解放。

年が更まると、きまって想いおこされるひとりの詩人がいる。二七才という若さを福岡刑務所で散らした朝鮮の抒情詩人、尹東柱のことである。芽吹く季節がそこまできてきているというのに、春に先立って死なねばならなかった詩人の在りようが、めぐりくる春とともに甦ってきてならないのである。この悲愴の民族詩人尹東柱は、一九一七年十二月三十日、かつての日本の植民地統治を心よしとしない志士たちによって一九一〇年代に拓かれた北間島、中国吉林省の東南部にあたり、朝鮮との境界をなす豆満江が南岸を形づくっている一帯の荒蕪地を伐り開いてつくられた、土の香も新しい明東村に生まれた。

一家は祖父が長老を勉めていたほどの敬虔なキリスト教徒たちであり、詩人の父はこの地で教師をしているという篤実な家庭であった。離れてきた祖国ではあったが、長子尹東柱の中等教育は本国で受けさすべく、東柱を一時平壤にあった崇実中学校に留学させていたが、学校が神社参拝問題をめぐって廃校されたため、卒えた中学校は龍井の光明中学校であった。一九三八年春、再び本国での勉学を志しソウルの延禧専門学校文科に入学、一九四二年延専を卒業するや、この訳詩集には収められない「懺悔録」という詩作品を書き残して戦争非常時色一色の日本へ渡った。

この辺の事情については以前書いた私の小論があるので、参考までに再録させていただくとしよう。ここで引用している作品の訳と、本詩集の訳とは歴然と違う個所がままあるが、原詩に近く、直訳に忠実なのは本訳詩集である。

ここに一冊の詩集がある。ひとりの人間の全生涯が、新書版型の厚みと大ききでしかなかったことに、その軽さと重みを同時に受けとめているところである。春のはしりに、巡りくる季節の息吹きに触れることもなく死んだ男のひそかな「生」の証しが、春たけなわの昨今、喧伝される「朝鮮ブーム」のただなかでひもとかれるのもまた格別な感懐だ。

また別の故郷

尹 東柱

故郷に帰ってきた日の夜  
私の白骨がついてきて同じ部屋に寝そべった

暗い部屋は 宇宙に通じており  
天のどの果てからか 声のような風が吹きこんでくる。

くらがりのなかで きれいに風化していく  
白骨を のぞき見ながら

涙ぐむのが 私だとは限らない。  
白骨が 泣くことだってあるのだ  
無垢な魂が目をしばたくように。

夜を徹して  
暗闇を犬が吠える。

私を逐いたてて  
志操高い犬が吠える。

行こう。

逐われる人のように  
やはり行こう。

白骨 ひそかな また別の  
美しい故郷へ行こう。

(筆者訳)

黄ばんだ仙花紙の粗末な表紙うらには、この詩人の略歴が消えいらんばかりの肖像写真に乗っかって簡潔に記されている。それもそのまま直訳で抜きとりた。 ( ) 註、筆者。

一九一七年二月三〇日、土の香もあらたな開墾地、北間島明東村に生まれた。中学をこの地で卒えるや中学校の同窓生であり姉従四寸でもある宋夢奎氏とともに上京、延禧専門学校(ソウル)文科に入学した。一九四二年、東京立教大学から京都同志社大学英文科へ籍を移し修学中、一九四三年七月帰郷のまぎわへ独立運動をしたという罪名によって日本警察に被検。未決囚として鴨川警察署に留置されていたが、二年の懲役刑を言渡され九州福岡刑務所で服役中、一九四五年二月一六日〃白骨ひそかなまた別の故郷〃へ永遠に旅立ってしまった。享年二九歳。その遺骸は吹雪さかまく故郷の地、間島に戻り恨みかじかん大地に埋まった。

一九四五年二月といえは、日本帝国主義が太平洋戦争に敗れるわずか六か月まえのことである。この獄死はまさしく「春」を目前にした憤死であった。引用した作品の日付けが日本に来るまえの年、つまり延禧専門を卒える年の「一九四一・九」となっているところから、この詩人はすでに覚悟を決めての渡日であったと推測されるが、この詩がいみじくも「大東亜戦争」を布告した東条戦時内閣の成立(一九四一・八)直後に書かれていることからして、圧殺される自由がいち早く反応した詩人の繊細な感覚がうぶ毛のようにわなないている感触を見てとれる。思うに延禧卒業のおり企図していたという七十七部限定版の処女詩集『空と風と星と詩』が理由も明かされなまま中断されたこと、さらには、この九月以後のへ旅立ちへのうめきを収録しきれなかつたもどかしさが差配していたにちがひなかつた。それほど翌年二月の渡日までに書かれた作品の色あいは、沈痛なまでに重い殉難者の息づきに満ちているのだ。敬虔なキリスト教徒の家庭に生まれ育つた彼からして、真理を究めるためのへ日本への道が、真実を守り通すための十字架を背負つた旅立ちであつたことも、けだし当然なりゆきともいえなくないが、やはり無残な道程であることに変わりはなかつた。変節をいさぎよしとせず、筆を折る詩人作家たちならまだしも、ほとんどの文人たちが時流におもねて安立をはかるか、溜息ばかりを現実の物かげで空々しくついていたとき、「亡びるものへの愛につかれた男」が屈辱の市街をよぎり「もし十字架がイエス・キリストに与えられたように許されるならば暮れゆく空の下



をこの首もたげ／花と咲く血しおしずかにたらしつづけ」るべくへまた別の故郷への日本へ渡ったのだった。

強権による自由の精神の完全な抹殺、およびそれと表裏の関係にある時局便乗型のエッセ文学の流行。一步一步の後退が全面退却となり、ついにまったく息の根をとめられるところまで行きついた。人間の生存のためのことごとく条件が奪い去られ、そのために文学は創造のエネルギーを失ってしまった。砂漠のような荒廃だけがのこされることとなった。（「日本プロレタリア文学大系」八巻、解説 竹内好）

このような当時の状況下で、一、二年奇妙なにぎわいをもよおさせた朝鮮ブームも仇花のようにあつけなく潰え去り、その端緒となつたはずの金史良までが詩人の渡来するまさに同じその時期、三か月にわたる二度目の拘留生活から解放されるや、詩人と入れ替るかのようにあたふたと朝鮮へ立ち帰ってしまったのだ。そして一年余りをまつたくの沈黙のうちに身をかくしていねばならなかつたほど、光からは隔絶した時代であつた。そのようなひどい時代を敢えて日本に來た詩人の心情は、並たいていのものでなかつたことだけは想像にかたくない。

死ぬ日まで空を仰ぎ見

恥じている一点のくもりもないことを

葉ずれにこもる風にさえ

私の心は身もだえた。

と詩集の『序詩』でうたつたなよなよしい詩心が、圧倒する圧制の嵐のなかでかほそいなま身を支えさきり、奥歯も砕けんばかりの変節の強制を命に代えて拒否しさつた意志の核であつたとは、ただ息を呑むばかりの抒情の質だ。私は久しいあいだこの詩人の遺稿詩集を求めたものだつた。はからずも去年の秋の終りころ評論家の安宇植の手を介してやっと入手したのだが、重い時代を生きた民族詩人の遺産としては、余りにもみすばらしく薄っぺらい「総量」であることに絶句した。延専時代に書いた自選未刊詩集『空と風と星と詩』以外のほとんどの作品および日記は日本の警察に押収され、探しようのないまま遺稿詩集が編み上がったからだ。今更のように憤りがさかのぼる。返して欲しい。かけ

がえない朝鮮人の遺産だ。「尹先生はどのような意味かは知らないが、大声で何かを叫びながら絶命した」とは、遺骸をひきとりに来た詩人の父に語ってくれたというところある日本人看守の話だそうなの。ああこの日本と朝鮮。たしかに聴いたはずの「ことば」が、虚空に消えるしかなかった未開日本人の朝鮮語。(「グブーム」のかけに)一九七二年六月号『新文学』)

本訳詩集には、尹東柱が延禧専門学校在学時に書いて出版を果せなかった自選詩集『空と風と星と詩』のすべてと、幸いにも故郷の弟に写しを送ってあったので残った立教大学入学時の五篇の作品、「白い影」「いとしい追憶」「流れる街」「たやすく書けた詩」「春」が収録されている。尹東柱の詩集としてはこの他に、あたらかぎりの遺稿を同じ標題のもとに集めて一冊に編んだ一九五五年二月一六日正音社(ソウル)発行の全詩集があるが、やはりこの遺稿集にも京都滞在時のものは一切含まれていない。それでも五部編成のこの遺稿集には、「第二部」を日本滞居時の記念に当てて空白のままにしてある。誰かがなんらかの手を尽して、埋めねばならない「空白」でもある。

及ばずながらその一端にでも加わろうと、訳を思いたって正音社刊の尹東柱詩集を長年手許に置いてあるが、今もって仕上げられずじまいである。産毛でおおわれているような尹東柱のことばの感性が、硬直な私の日本語をもってしてはなかなかもってかかえきれないのである。下手をするとなよなよしい感傷ばかりのさばりかねないので、怖い。それを在日世代の三世に位置する鄭昌憲君と、日本の若い友人である磯林和満君とが共同してやっていた。朝鮮語を生活感情のなかで知っている者からすると、両君の訳にはどこかそぐわない不足感が介在しないでもないが、反面ウーンとうならせられる日本語の駆使も少なからずあって、大いに啓発された。しかもこの両君の「朝鮮語」が、大阪文学学校の自主的な生徒活動、「朝鮮語講座」のどつどつしい学習のなかから生まれだつた実りであることを、痛く、かつ深く、熱い共感をもって受けとめるものである。目に見えて、大きく右へ振れつつある現今の日本の風潮のなかにあって、この労力は自他ともどもの錘ともなるう。

尹東柱の死を決定づけた物証が、禁止された母国語、朝鮮語による創作ノートであったことを今いち度きびしく思い返しつつ、京都大学に在学中同じく捕われ、同じ獄につながれて、尹東柱よりも二十日長く「春」に近づきながら、骸骨さながらの状態で息絶えた姑徒四寸宋夢奎の生涯をも、残せなかつた死として刻みなおしている。無残だが、詩人はことばの故に栄光であつた。

この訳詩集は、正音社『尹東柱詩集』第三版を底本とし、訳文については、鄭氏と私とが別個に訳したものを、照合しあい、私の誤訳については鄭氏が朱を入れ、討論しあい、最終的に私が確定しました。発音についても、ほぼ同様の過程を経て、最終的に鄭氏が確定しました。両訳者とも、辞書に頼っての訳業ですので、難解な用語法が多々ありました。たとえば『いとしい追憶』の令、今、や、『春』の~~은, 은~~などです。これらは、金時鐘氏の教えを受けました。なお『道』の執筆日時は、正音社版のままにしておきました。

たしかエンゲルスだったと思いますが、言語は文法、基本単語、熟語、発音の四つの要素でできている、という意味のことをどこかで述べています。ということは、文法書を精読すれば、極めて短期間に辞書を片手の付け焼刃の翻訳者ができあがる、ということなのです。私の訳業は所詮この程度のもに過ぎません。つまり、鄭氏の助言がなかったら、この訳詩集は不可能だったということなのです。

無謀とも言える仕事をあえてした理由には、世界中の詩を読んでみたいという野心とか、尹東柱の留学先の学校に私も一時在籍したとか、朝鮮の若者に人気のある詩人にもかかわらず、邦訳があまりないとか、色々ありますが、最大の理由は、ある人への鬱屈した思いが、翻訳というかたちをとったということです。

翻訳をされていて気付いたことは、朝鮮語にはP音で始まる単語が多々ある、ということです。オノマトペや外来語を別にすれば、日本語では皆無に近いでしょう。そこで、岩波古語辞典の「星」の項をみますと、「朝鮮語 *pyöl* (星) と同源」とあります。この他にも、齒 (*pya*) 箱 (*pakoni*) 蜂 (*pol*) 螢 (*ponteri*) 影 (*kuri*) などを、同源としています。もちろん、同源語はこの他にもたくさんあげられています。つまり、古代日本語と朝鮮語との間に何らかの関係がある、ということでしょう。

内容について言えば、尹東柱は、「恥かしい」と何度も言っています。たとえば『道』の中で「空は恥かしげに青い」とあります。私はこのような空の色を、まだ見たことはありません。はずかしめを受けた側と加えた側との感性の、あるいは情緒の溝が、ここにはありません。その溝を少しでも埋めることができるなら、この訳詩集は生き残ってくれるでしょう。なよなよしい抒情詩人が、獄中で殺されねばならなかった悲しむべき歴史があります。また、古くかつ深い日本と朝鮮との関係があります。「星をかぞえる夜」の中にでてくる尹東柱の「名が埋められた丘」とは？もし地上にあるのなら、私は尋ねてみたいと思います。その営為が、まぎれもなく日本の「十字架」なのです。

(磯林和満)

ほくの中において「朝鮮」なるものが暗い闇の向う側のように思えて、ずっと過してきた。一族の中核にいた祖父母が発することは、大阪弁とチャンボンになったニンニクくさいことは、わけのわからない、しかしまわりにいる日本人からへだたった一族の中核で流通し、ほとぼしすることは、そのよるなものとしての朝鮮語がぼくたちの世代ではほとんど流通しなくなって、自然に一族も解体の方向にむかっている。ほとんど話せないし、朝鮮語で考えることなどさらさらできないほくであるが、かつて一族の中核の混沌としたヴァイタリティーそのものだった祖母のあふれさせる体臭のようなことばに、今では闇の中をかきわけて聞きにいききたい、近づいていききたい気持なのです。

一九四五年の解放までに、朝鮮から遠くへだてられていた人々は、正確にはわからないが三百万人くらいだといわれている。尹東柱の一族もそのような人々であり、ぼくたちの一族もまたそうなのだ。空と風と星、すべて流れ移ろい、そしていつも遠くそして身近かにあるものを歌った魂は、坂道の上で自分の名前を朝鮮語で書いておくことによって、あとにつづく者たちに進むべき道を教え、峠を越えることを教えている。彼の幼な友だちであり、遺稿詩集を出すことに尽力した文益煥氏が今、獄中にあることを思うにつけ、尹東柱の殉節精神は現在も受け継がれているのだということに気づくのです。ほく自身、さまざまにやり出した朝鮮語自主講座の中から、このような訳詩集がうまれたことに驚きを感じ、怠惰な自分が叱咤されているのに気づくのです。

この訳詩集は、磯林さんの尹東柱の詩に対する情熱と日本語に対する探究心がなければとうていできなかつたと思います。発行が大巾に遅れたのも全てほくのせいで、彼はやきもきする日が続いた

ろうと思うと、ほんとに申しわけない。  
最後になりましたが、忙しいなか、心よく解説をひきうけてくださった金時鐘先生、最後の最後までタイプ打ちの労をとってくださった中松真智子さん、印刷所の手配をしてくださった高村三郎氏、そのほかさまざまの人の励ましがひとつになって、この訳詩集に結実したといえます。  
あらためて熱い感謝の言葉を送ります。

(鄭昌憲)

#### 参考書

朝鮮の抵抗文学―冬の時代の証言

金学鉉 編訳 拓植書房

空・風・星の詩人―「恨」と抵抗に生きる

金学鉉 季刊「三千里」十号

傷痕と克服―韓国の文学者と日本―

金允植 著 大村益夫 訳 朝日新聞社

現代韓国文学選集 第五卷 詩集

金素雲 訳 冬樹社

